

## PHR 時代の学校保健・学校心臓検診のあり方

石見 拓

京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 予防医療学分野

デジタル社会を迎え、日常的に健康・医療に関わる情報を記録し、活用可能な環境が整いつつある中で、パーソナルヘルスレコード (PHR) に期待が集まっている。政府も PHR の普及を重要施策の一つと位置付けており、学校健診の結果や薬剤情報等を本人・家族に PHR として還元する取り組みが本格化している。

PHR サービスを活用することで、①健康・医療に関わる情報の生涯にわたる連続的な活用、②データに基づいた生活習慣の改善による健康増進、病気の予防、健康寿命の延伸、③日常的な健康情報の活用による医療の質の向上、といったことが期待される。

学校心臓検診はわが国が世界に誇るシステムであり、臨床的意義は大きいと考えられるが、残念ながらデータのデジタル化、本人・家族への還元、卒業後の引継ぎなどが不十分で、十分に活用しきれていないと思われる。PHR の本格活用が期待される今こそ、学校心臓検診をはじめとした学校保健の各種取り組みの価値を高め、真に心臓突然死予防などに役立つ大きなチャンスである。これを実現するためには、日々蓄積される健康・医療等に関するデータは本人から生まれるものであり、本人や家族の意思のもとで利活用するべきであるという基本的な考え方のもとで、世代をまたいで貴重な検診結果などの PHR データを共有し、本人や家族の役に立つサービスを提供していくことが求められる。学校健診データの還元は、単にデータを返すだけでなく、データ活用した健康管理・増進、病気の予防の意義を知り、適切な情報の管理、活用の仕方を学ぶという意味でも重要である。本人・家族の意思のもとで生涯にわたって健康・医療情報を活用できる社会の実現に向けて、PHR 時代の学校保健・学校心臓検診のあり方、課題と展望について議論したい。